

令和8年度 第2回瑞浪市市之瀬廣太記念美術館協議会 会議録

日 時：令和8年9月10日（木）13時30分～14時30分

会 場：瑞浪市化石博物館 レクチャールーム

出席者 <協議会委員> 柴田 増三（社会教育関係者）※会長
小栗 茂 （学識経験のある者）
加納 礼爾（学識経験のある者）
藤井 志保（学校教育関係者）
早川 美幸（家庭教育の向上に資する活動を行う者）
<事務局> 加藤 百合子（みずなみ未来部次長）
水野 義康（館長兼スポーツ文化課長）
砂田 普司（スポーツ文化課長補佐兼係長）
安藤 佑介
河野 和弘

1 あいさつ

水野館長（内容は省略）。

2 協議事項

市之瀬美術館の今後のあり方について

【事務局より資料を用いて市之瀬美術館の現状（開館日数、入館者数、維持管理費等）について説明】

会 長：只今事務局から美術館の現状について説明があった。現状を踏まえ、事務局に今後のあり方や運営方針に関する具体的な考えはあるか。

事務局：まずは現状に対する委員の皆様の率直な意見をお伺いした後、それを参考に事務局内で考えをまとめ、今後の運営に関する市の方向性を決めたいと考えている。

委 員：本来であれば、事前に事務局が具体的な方針や方向性を示したうえで協議会に諮ることが望ましい。美術館の現状については、体験型のワークショップの開催等、来訪者がわくわくするようなプログラムや仕掛けが十分用意されているとは言い難い。いわゆる市民参加型で来館を誘導できるような企画を実施するのは、現状の職員数・予算では大変だろうが、美術館が存在する以上は、課題解決につながる施策を打ち出してほしい。

委 員：美術館が存在することは市の誇りであり大きな魅力といえる。運営する市は、入館者数の増加を図るために努力する立場である。ただし、現状として入館者数は減少し、財政状況との兼ね合いを考える必要がある点は理解できる。できる限り開館してほしいが、仮に開

館日数を縮小したとしても、学校団体の見学時等は必ず開館するというようにサービスの質が低下しないように対応すべきである。

委員：来館者のいない 88 日間に対しても受付業務の委託料を支払っている現状は率直に改善が必要と考える。例えば普段の開館日数を減らしつつ、展覧会期間中は開館日を増やすというような幅を持たせた運用ができるのであれば、常に週 6 日開館する必要はないと思う。
なお、学校団体等との連携行事は今後も継続すべきと考えるため、集客がないからといって閉館を考えることは望ましくない。

委員：瑞浪市の魅力の一つに市之瀬美術館を上げる声を耳にしたことがある。幅を持たせた開館方法で運営していくことに賛成である。

会長：様々な課題を抱えながらも、市之瀬美術館は今後も開館させるべきという意見が多数出された。ただし、開館日数の縮小等、運営方法の変更だけで果たして解決できるのか予測が難しい。市は今後のあり方に関する具体的な施策や方向性を示すべきと考える。

事務局：先般財政部局との協議を行った結果、新博物館建設は保留することとなったため、担当課としては今年度に改定を予定している瑞浪市公共施設等総合管理計画に、今後少なくとも 10 年間は現在の施設を維持する案を管財部局に提出した。担当課としては、新博物館が建設されるまでは、必要な修繕を行って施設を維持していきたいと考えている。

委員：新博物館建設計画は瑞浪市にとって必要な事業として、担当課は主張を続けてほしい。協議会としても、必要な計画として認識している。博物館や美術館を失くす、あるいは文化をないがしろにするようでは市の魅力は大きく低下する。我々は博物館・美術館は市にとって、絶対に必要な施設だと誇りをもって協議会に臨んでいる。今後も市民の声や意見をよく集め、具体的な形にしていく 10 年間であってほしい。

会長：以上、今後の美術館の運営に関する方向性について様々な意見が出された。これらを総括すると、美術館の閉館については検討の対象とはしない。新博物館建設まで、美術館機能を維持するために必要な改修等を行っていく。開館日数の減はやむを得ないものの、サービスの質を出来るだけ低下させないようにするというものであった。これらの意見を踏まえ、事務局には開館の具体的な内容や方法について財政部局等との協議・調整等を進めることをお願いする。

その他、意見等がなければ散会としたいがどうか。

【特に意見や質問は無く、散会】